

使徒言行録8章26節一40節
『キリストを告げ知らせる』

生まれてまのないキリスト教会に一人の信仰者がいました。フィリポという名のその人は、ギリシア語を話すユダヤ人でした。つまり彼はユダヤ生まれユダヤ育ちというのではなく、ユダヤ以外の地で、外国で生まれるとか育った人で、何らかの事情でエルサレムに来て、そこでキリスト教会に行くようになった人でした。

しかし、彼がエルサレム教会で信仰生活を送る中で迫害が起こり、彼はエルサレムの町からやむなく離れなければならなくなりました。

フィリポはその弾圧を積極的に転機と受けとめ、ユダヤ以外の地での福音伝道始めていくのです。彼はまずサマリアに行き、そこでイエス・キリストの福音を告げ知らせます。次いで彼はガザへと向かいます。今日でもニュースなどでもたびたび報道されるガザ地区のガザです。

フィリポはその道すがら一人の人と出会うのです。

その人はエチオピアの女王カンダケの高官でした。ここで言うエチオピアというのは現代のスーダンにあたる国ですが、その国の高官と出会うのです。高官と訳されている言葉は、宰相、つまり日本で言えば、総理大臣という意味の言葉ですから、王家以外の最高位の人ということになります。その人がエルサレムに礼拝に来ていた、その帰りの道の途中だった。それはとても驚くべきことです。エルサレムから遠く離れた国の高位高官がわざわざエルサレムに礼拝に行った、というのですから。自分の国の宗教もあつたにもかかわらず、わざわざ外国の神を礼拝しにエルサレムに行くというのは、当時の常識から考えて驚くべきことでした。

しかも彼はおそらくはエルサレムで買い求めた聖書の巻物を持っていて、それを馬車に乗りながら朗読していたというのです。聖書と言っても今のように一冊の本になっているわけではない。それぞれの書物、創世記なら創世記が巻物に記されているわけです。彼はイザヤ書の巻物を持ち、当時の習慣だった声をあげてそれを読んでいたのです。なぜ彼が旧約聖書の中のイザヤ書を、それもイザヤ書53章を朗読していたのか、それはわたしたちの想像力を強く刺激します。

しかし、少なくともここからわかることは、このエチオピアの高官が何かを切実に求めていた、ということです。それは彼が、心の渇きとか、心の傷とか、満たされない何かを抱えて生きていたということです。外国人の、しかも高位

高官である彼が遠くエルサレムまで礼拝に来て、聖書の巻物を買ひ、聖書に聞いていたのです。

彼が求めていたものは、お金で買えるものではなかった。お金で買えるものなら、彼はすでに手に入れていたでしょう。そうではなくて、彼はもっと別のものを求めていたのでしょう。それはいったい何だったのでしょうか。

フィリポに霊が働きかけ、「追いかけて、あの馬車と一緒に行け」と促しました。フィリポが自分で判断したというのではなくフィリポを促す神の働きがあったということです。フィリポは彼に尋ねます。「読んでいることがお分かりになりますか。」

高官は「手引きしてくれる人がなければどうしてわかりましょう。」と率直に応えます。聖書は言うまでもなく自分で読むものです。自分の眼と自分の心で必要があります。しかし手引きしてくれる人がいなければわからない。説きあかしてくれる人がいなければわからないのです。聖書はそういう書物です。それはたんにこの高官が聖書のことが勉強不足だったから、という意味ではありません。そうではなく、この聖書という書物は、イエス・キリストがまことの救い主であるということを感じて受けとめた人によって説きあかされるのでなければわからない、ということなのです。どれほど勉強しても、イエス・キリストを主と仰ぐ信仰によらなければ、説きあかすことはできない。そしてその手引きを受けなければ、どれほど自分で頑張ったからと言って、わかる書物ではない。

高官はフィリポを自分の馬車に乗せ、「どうぞ教えてください」と、言います。彼が読んでいたのは、イザヤ書53章7節8節の一部でした。イザヤ書53章というのは、聖書の中でも特別な箇所であり、苦難の僕の歌と呼ばれる聖書箇所です。救い主は自ら人々の苦しみを負っていかれる救い主であることが語られている箇所です。救い主は、人々の上に君臨するのではなく、人々に仕えぬく主であり、僕として歩まれる主であることがここで語られる。「彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた」と預言者は語る。つまりイザヤ書53章は、旧約聖書におけるキリスト預言の言葉なのです。なぜなら、53章で語られる苦難の僕とは、十字架にかかり人々の罪を背負った主イエス・キリストに他ならないからです。

エチオピアの高官は「預言者はだれについてこういっているのですか。自分についてですか。だれかほかの人についてですか。」と尋ねる。「そこでフィリポは口を開き、聖書のこの箇所から説き起こして、イエスについての福音を告げ知らせた。」のです。

エチオピアの高官はイザヤ書53章に心を引きつけられていた。彼の眼はこの聖書の言葉から離れなかった。この高官は「苦しみを負う僕」ということに心引きつけられていた。彼は高官として人の上に立っていました。地位の高い人です。交換しての自負や誇りも当然あったでしょう。しかし彼は一方で苦しみを負う僕、というイザヤ書の言葉に心を留めている。そこに彼の求める何かを彼は感じたのでしょうか。彼のこころの渇き、傷、彼の負っている苦しみに応える何かを予感したのでしょうか。

人はさまざまなことで苦しむものです。ただ苦しむだけでない。その苦しみを胸に秘めて誰にも言うこともできず、20年30年と誰にも見えない深い穴の中で、一人その苦しみと戦い続ける、ということだってあるのです。

ある小説に一人の女性の主人公が登場します。彼女は26歳。短大を出て、会社勤めをし、結婚し、二年後にはローンを組んで新築のマンションを買い、今も会社勤めを続けている。夫は親切で責任感の強い人。つまり彼女は恵まれた生活をしている。その彼女があるときから自分の名前を忘れるようになってしまう。自分の名前が逃げていくのです。彼女は大きな病院で診察を受けるのですが、特に何の病名もつかない。担当した医師は精神科の領域ですね、というようなことを言う。それで彼女は区役所に新しくできた「心の悩み相談室」に行き専門家によるカウンセリングを受けるのです。彼女はカウンセラーの女性のおおらかさに包まれていき、これまでの自分の人生を語り始める。彼女の口を通して語られる家族の関係や夫との関係はまずまずの良好な関係であり、実際なにかもめごとがあるわけでもない。

しかしカウンセラーは注意深く彼女の話聞き、あることを受けとめる。

彼女は母親と、姉から表向きはともかく、深いところで愛されていないという傷を負っていた。しかも、その傷を負っている自分というものを見ないように蓋をしてきた。自分は母から本当には愛されていない、姉からも愛されていない、ということを受けとめることが怖くて、見ないように、無視するようにして蓋をしてきた。彼女はそのことを意識の外に追い出してきた。だから自分の過去の話をして、家族の話をしてそのことは何も出てこない。意識にも登ってこない。

だが、彼女が名前を忘れるようになったということ、名前とはいつも言うようにその人の人格が盛られたものですが、その名前が逃げ出すということは、自分が忘れられ、自分というものがどこかに逃げだしていくということです。自分の心の奥深くにとげのように刺さっている傷を、長いあいだ蓋をし続けることで、彼女は自分というもの、ホントの自分を見失っていく、ホントの自分

がどこかに逃げだしてしまっていく経験をしていくのです。

わたしたちは、一人一人固有の苦しみを負います。それは向こうからやってくる痛みもあれば、自分のうちから生まれてくる痛みもあります。一時的な痛みというものもあれば、その人の人生の中でずっと続いていく痛みもあります。その人がじっと押し殺すようにして、自分の心の奥深いところにしまい込んでいる痛みもあり、表向きはともかく、心の深く深いところでその人に傷つけている痛みもあります。エチオピアの高官がどんな心の飢えや渇きや傷を負っていたのかはわかりません。しかし彼はわたしたちの痛みを負ってくださる僕の話を読んで、そこに引きつけられていく。そしてフィリポがその僕こそ、イエス・キリストであることを解き明かし、イエス・キリストの福音を告げ知らせると、彼はそのことを受け入れ、自分から洗礼を受けたいと申し出たのです。ここでエチオピアの高官の魂のドラマが端的に描かれているのです。

わたしたちがここで知らされること、それはイエス・キリストの福音は国籍や、文化や、地位や、身分にかかわらず、一人一人の人間の心の深みに入っていく、その恵みの力をあらわすのだ、という驚くべき事実です。人はみな違う。一人一人はそれぞれ固有の痛みがある。どんな高位高官であろうが、どんな人であれ、人としての痛みや、心の重荷はある。しかしイエス・キリストの福音は一人一人の心の闇の中にも、心の奥深くに入っていく、そこで恵みの力をあらわすのです。なぜなら、十字架の福音はその人の痛みの底に立ち続ける福音で、痛みの底からその人を支える福音だからです。フィリポはそのことを信じて、イエス・キリストを告げ知らせた。これはキリスト教会の最初の外国人伝道です。そしてこの伝道の歩みがあつてわたしたちも今こうして、イエス・キリストとの出会いを与えられているのです。イエス・キリストの福音の驚くべき恵みを力を受けとめて、わたしたちも臆することなく、イエス・キリストを告げ知らせる者となっていきましょう。